

夫婦間の葛藤の認知が 家族機能と子どもの抑うつに及ぼす影響

○森原 愛来・赤澤 淳子
(福山大学大学院人間科学研究科)

問題と目的

夫婦の関係は家庭や子どもの精神的健康に影響するとされている(菅原, 2002)。夫婦の葛藤の原因の認知が子どもの家族機能の評価に(川島, 2005)、また、夫婦の葛藤の深刻さが子どもの抑うつ状態に影響を及ぼしていること(川島他, 2008)が明らかになっている。しかし、葛藤の原因の認知が抑うつに、深刻さが家族機能に影響を及ぼすかは検討されていない。そこで、夫婦の葛藤の原因と深刻さが家族機能と子どもの抑うつに及ぼす影響について検討することを目的とした。

方法

調査対象者 分析対象は 115 名(平均年齢 19.19 (SD = 0.75))であった。

調査内容 ①夫婦の葛藤の原因は子ども・母親・父親の夫婦間葛藤認知尺度(川島, 2005)の子ども対象の 13 項目, ②両親の葛藤の深刻さは夫婦間葛藤認知尺度(川島他, 2008)を 9 項目, ③家族機能は家族機能測定尺度(草田・岡堂, 1993)を 16 項目, ④抑うつは自己評価式抑うつ尺度(SDS)(福田他, 1965)を 20 項目, 用いて測定した。

調査方法 大学の授業時間内に実施された。

倫理的配慮 福山大学人間文化学部心理学科で規定による倫理審査を受けた(2024-H-36-05)。

分析方法 HAD18(清水, 2016)を用い、重回帰分析を実施した。

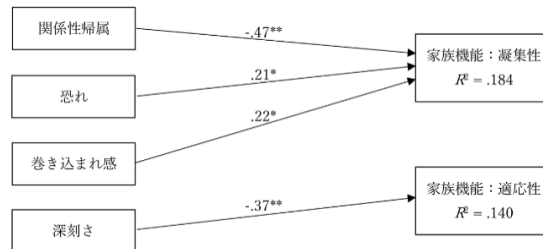
利益相反 演題発表に関連し、開示すべき COI 関係にある企業はない。

結果

両親の葛藤を独立変数、家族機能と抑うつを従属変数として、ステップワイズ法で重回帰分析を行った。その結果、「関係性帰属」が負の影響、「恐れ」「巻き込まれ感」が正の影響を「凝集性」に及ぼしていた。また、「深刻さ」が「適応性」に負の影響を及ぼしていた(Figure 1)。「外的原因帰属」と「恐れ」が「抑うつ」に正の影響を及ぼしていた(Figure 2)。

Figure 1

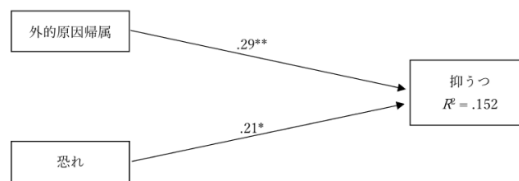
両親の葛藤が家族機能に及ぼす影響



※ 実線の上の数値は標準化偏回帰係数 (β) を示す (** $p < .01$, * $p < .05$)

Figure 2

両親の葛藤が抑うつに及ぼす影響



※ 実線の上の数値は標準化偏回帰係数 (β) を示す (** $p < .01$, * $p < .05$)

考察

本研究の目的は、両親の葛藤に対する子どもの認知が家族機能と抑うつに及ぼす影響を検討することであった。関係性帰属が凝集性を低下させたことは、家族成員間の境界が曖昧になると機能が損なわれるとする構造的家族理論(Minuchin, 1974)と一致した。葛藤の原因は両親のお互いにあると認知すると、情緒的距離の取り方を困難にするため、凝集性の低下を招いたと考えられる(川島, 2005)。恐れや巻き込まれ感が凝集性を高めた結果は、見かけ上の親密さの現象を示している可能性がある(Minuchin, 1974)。また、川島他(2008)の研究で葛藤の深刻さが適応性を低下させた点は、本研究でも示唆された。さらに、外的原因帰属や恐れが抑うつを高めたのは、統制不能感を介して抑うつを強める認知的評価理論(Lazarus & Folkman, 1984)で説明できる。今後は、夫婦間の葛藤からの影響過程を構造的に検討し、子どもの対処行動を含めたモデル化を進める必要がある。